

井伊直虎と直政 川瀬 和男

井伊直虎の生涯

井伊家第2代当主・直盛の娘として生まれる。母は新野親矩の妹・祐椿尼

天文11年（1542年）今川家は尾張の戦国大名・織田家と対立を深め、三河国の田原城を攻撃した。この戦いには井伊直平から家督を継いで当主となっていた直宗も参戦していたが、不幸にも討ち死にしてしまい、家督は直宗の子・直盛に引き継がれた。

直盛には男子がいなかったため、叔父・直満の子・亀之丞（直親）を娘（直虎）の婿に迎えて後継者とする予定だった。

天文13年（1544年）井伊家を揺るがす大事件が起きる。直満と弟・直義が今川義元に呼び出され、誅殺されてしまったのである。この事件の裏には、井伊家の重臣・小野道高の暗躍があった。先述のように直盛は後継者として亀之丞を婿養子に迎える方針であったが、小野道高はこれを嫌がって直満や直義と対立し、今川義元に直満らに謀反の気配があると讒言を吹き込んだという。

井伊直満が謀反人として処罰されてから程なくして、当時わずか十歳の息子・亀之丞にも追ってが迫った。亀之丞はいったん山中に匿われたのち、かます（穀物や塩を入れる袋に隠されて家老・今村正実によって背負わされ、信濃国の松源寺へと逃がされた。一連の逃走劇の裏には、井伊一族で龍潭寺の僧である南溪和尚の尽力があったという。

こうして亀之丞は身の安全を確保されたが、婚約者であった直虎はひとり井伊谷にとり残され、婚約の話も宙に浮いた状態になってしまう。直虎は我が身の不幸に悲嘆して、周囲の反対を押し切って出家してしまった。そして次郎法師と名乗る。

天文23年（1554年）讒言によって父・直満を死に追いやった小野道高が病死。

弘治元年（1555年）ようやく亀之丞は井伊谷に帰還を果たした。そして以前からの予定に従って、直盛の養子に迎えられて直親と名乗る。しかし、婚約の約束までは元通りにはならなかった。直虎はすでに仏門に入っており、人の妻となることはできない身となっていたのだ。直親は井伊一族の奥山朝利の娘を正室に迎え、直虎は生涯独身を貫く運命となった。

永禄3年（1560年）今川義元は25000ともいわれる大軍を率いて尾張国へと侵攻。直盛も出陣し、義元の本隊と同行していた。

今川軍の兵力は当時尾張国を治めていた織田信長の総兵力を大きく上回っており、戦いは今川軍の圧勝に終わるはずだった。しかし、義元本隊が桶狭間で小休止をとっているところを織田軍が奇襲し、義元が討たれ直盛も戦死してしまう。今川家にとっては、まさかの敗北であった。

永禄4年（1561年）井伊家には虎松という男子が生まれた。かつて直満が誅殺された際には子の直親も罪に問われそうになったが、直親が殺された際にも同様に虎松を誅殺する命令が下された。しかし、井伊家の縁戚で直親とも交流があった新野親矩が、今川氏真や氏真の祖母・寿桂尼に助命を嘆願する。新野親矩の身命を賭した願いは今川家を動かし、虎松は新野家に引き取られて養育される

ことになり、命を救われた。この虎松がのちの井伊直政である。

永禄5年（1562年） またも井伊家に悲劇が訪れる。かつて讒言によって井伊一族の命を奪った小野道高の子・道好が、今川氏真に直親と松平元康が通じているという讒言を吹き込んだのである。直親は申し開きのため氏真の居城へ向かうが、途中で今川家臣・朝比奈泰朝に襲撃され、殺害されてしまった。

永禄6年（1563年） 井伊一族の長老格で虎松の後見人を務めていた直平が、今川氏真から離反した天野影貫を攻めていた最中に突然死。

永禄7年（1564年） 引馬城（浜松城）攻めでは、虎松の恩人である新野親矩までもが討ち死にする。

永禄8年（1565年） 一族や関係者の相次ぐ死によって幼い虎松は後ろ盾を失い、井伊家の命運は潰えたかと思われた。しかし、龍潭寺の南溪和尚がここで妙案をひらめく。南溪和尚は出家していた次郎法師（直虎）を呼び戻して井伊家の当主にすえ、虎松の後見人としたのである。直虎が井伊家当主となった正確な時期は不明だが、永禄8年9月15日には次郎法師の名で龍潭寺への寄進が行われた記録があるため、これ以前に当主の座についていたと考えられる。

永禄9年（1566年）今川家は井伊谷と周辺地域を対象に徳政令（借金の帳消し）の発布を命じた。

永禄11年（1568年） 11月ついに今川家の介入によって徳政令が、強行されるが直虎が統治した2年あまりの間、井伊谷に大きな混乱は起きなかったとされる。

井伊谷での徳政令施行からまもなく、直虎は井伊谷の統治権を剥奪され、龍潭寺に身を寄せた。代わって統治者となったのは、かつて讒言によって井伊直親を殺害させた小野道好だった。一連の動きに関しては、今川氏真と小野道好との間に密約があったともいわれる。しかし、小野道好の栄華もつかの間だった。わずか1ヶ月後に甲斐国の武田信玄が今川家と同盟を破棄し、三河国の徳川家康と協力して東西から今川領の駿河国・遠江国へ侵攻したのである。

永禄12年（1569年） 今川氏真は武田・徳川両軍に侵略され掛川城で降伏。大名としての今川家は滅亡した。しかし、武田信玄と徳川家康はその後敵対する。

元亀3年（1572年） 信玄は25000の大軍を率いて、遠江国へ侵攻した。このとき、信玄配下の山県昌景と秋山虎繁に別動隊を任せ、三方からの同時攻撃を行った。山県昌景の軍勢は信濃国を出発して長篠城に入り、井伊谷へと攻め入った。その結果、井伊谷三人衆は浜松城へと退却した。その後、山県昌景は武田信玄の本隊と合流し、三方ヶ原の戦いで徳川軍と激突。この戦いで武田軍は徳川軍を完膚なきまでに粉碎し、続いて野田城に攻め寄せた。

元亀4年（1573年） しかし、野田城を攻略した直後、武田信玄は突然陣中で病に倒れ武田軍は撤退。それから間を置かず、武田信玄は病没した。徳川家と井伊家はまさに九死に一生を得て、勢力を盛り返したのだった。

天正2年（1574年） 虎松は、直親の法要に出席するために井伊谷へ帰還した。このとき虎松の母と直虎、直虎の母、そして南溪和尚らの間で話し合いが行われ、虎松をいったん松下家の養子としたうえで、徳川家に出仕させて井伊家を復興するという方針が決まったという。

天正10年（1582年） 11月に虎松は元服して井伊直政と名乗るようになった。しかし、直虎がこの晴れ舞台を見ることはかなわなかった。同年8月26日日、直虎は龍潭寺境内で死去。 一

族が眠る龍潭寺に葬られた。享年は不明だが、許嫁・直親の年齢に近いと仮定すると、まだ40代半ばであったと推察される。

井伊直政の生涯

天正3年（1575年） 虎松は井伊万千代と名を改め、その翌年に初陣の機会を得る。

天正4年（1576年） 2月遠江国に侵攻してきた武田勝頼と徳川家康が芝原で戦った。

「寛政重修諸家譜」にはこの戦いが万千代の初陣で、戦功をあげたと記されている。

天正10年（1582年） 万千代は元服して直政と改名。精鋭部隊である旗本先手役に任命され、その武名を天下に轟かせていく。この年織田・徳川の連合軍は甲斐国へ侵攻し、宿敵・武田家を攻め滅ぼした。織田信長は武田家討伐に協力した報酬として、武田家の旧領だった駿河国を徳川家康に与えた。そして本能寺の変で信長が倒れると、徳川家は情熱が混沌としているうちに行動し、甲斐国と信濃国をも手中おさめた。

このとき、直政は戦国屈指の猛将として名高い武田家臣・山県昌景にあやかり、山県昌景が率いた「赤備え」を家中に取り入れた。赤備えとは、文字通り武具や旗など合戦で身につけるものをすべて赤色で統一した部隊で、武田家の強さの象徴といえる存在だった。以後、直政の部隊は「井伊の赤備え」と呼ばれるようになり、各地の戦場を震撼させていく。

天正12年（1584年） 3月から小牧・長久手の戦いと呼ばれる一連の戦役が始まった。

この戦いは、直政が赤備えを継承してから初めての大戦だった。

天正13年（1585年） 真田攻め（第一次上田合戦）にも派遣されるなど、直政は徳川家での地位を着実に高めていく。

天正14年（1586年） 小牧・長久手の戦いを制した秀吉は、力関係を内外に知らしめるため、家康を大坂に呼び出した。しかし、家康が要請に応じず、懐柔策として自身の母親・大政所と妹・朝日姫を人質として家康のもとに送り込む。家康はこれ以上、誘いを断り続けるのは難しいと考え、上洛した。人質となった大政所と朝日姫の警護を任された直政は、毎日欠かさずふたりのもとを訪ねて世話をした。大政所は直政の実直な人柄と、容姿端麗で立派な武者ぶりに惚れ込み、秀吉のもとに帰る際には警護を担当してほしいと懇願したという。直政は彼女たちを大坂まで送り届け、秀吉から従五位下・侍従兼兵部少輔に叙任された。

天正18年（1590年） 小田原征伐が行われたとき、秀吉は関東以西の全土を手中にしており、東北の諸勢力にもすでに降伏を勧告していた。唯一抵抗を続けていたのは、小田原城を拠点とする北条家だけで、戦いはいわば消化試合ともいえる決着の見えるものだった。こうした理由から秀吉軍の諸将は無理な戦いを避け、小田原城を囲んで数か月も持久戦が続いた。しかし、諸将が攻めあぐねているなかで、直政だけはいつもと変わらぬ積極性を発揮する。赤備えを率いた直政は、大胆にも小田原城の篠曲輪に夜襲をかけたのである。直政はこの戦いで持っていた鉄砲が破損して負傷したが、まったくひるむことなく戦い続け、大いに戦果をあげたという。

慶長3年（1598年） 上州和田城に移り、高崎城と改める。

慶長5年（1600年） 徳川家康を大将とする東軍と、石田三成が率いる西軍が激突し指示が下されていた。しかし「徳川家の命運を決める戦いは、徳川家がしかけなければならない」と考えていた直政は、福島隊を無視して前線に進んだ。これに気づいた福島隊の可児才蔵が制止するが、直政は

強引に押し通って福島隊に道を開けさせた。その直後、井伊隊が発砲し、大戦の火蓋が切って落とされる。直政の行為は明確な軍紀違反であったが、戦後に直政が咎められた形跡はない。一説には、家康からも直政に抜け駆けの指示が出ていたともいわれる。戦いは西軍・小早川秀秋の寝返りをきっかけに、東軍が優勢となる。しかし、勝敗が確定しても直政は攻勢を緩めず、自陣の突破を試みていた島津隊を猛然と追撃した。その結果、直政は銃弾を受けてしまう。つねに最前線で戦三成が治めていた近江国佐和山18万石を拝領した。やがて直政は家臣と共に佐和山城に入城。三成が残した長屋に住むことになるが、佐和山城は戦乱で荒れ果てていたため、直政は新たな城を築城することを決める。

慶長7年（1602年）直政は異例のスピードで出世を果たした。周囲から妬まれたことはいうまでもないだろう。直政は家康の期待に応える働きを見せることで、こうした妬みを封じ込めた訳だが、一方で、常に結果を出し続けることに相当な重圧と緊張感があったとも推察できる。そうした理由からか、直政は家康に対して、驚くほど実直であった。関ヶ原の戦いから2年後の慶長7年、先の戦いで受けた傷が悪化し、直政は42年に及ぶ生涯に幕を閉じる。

参考文献：「井伊家のひみつ」「女城主・井伊直虎」他